

訳者あとがき

本書はミッチ・レイシーによる『The Scrum Field Guide: Practical Advice for Your First Year』の翻訳です。原著は2012年に出版されたものですが、とても人気が高く、Amazon.comでは☆4.9 (134件のレビュー^[1])がついています。また原著は2016年1月に第2版が出版されましたが基本的に同じ内容で、第1版に何章か追加したものとなっています。第1版の訳である本書の内容は、今でも変わらず通用するものです。

ここですこし、本書の原題、The Scrum Field Guideのお話をしましょう。

Field Guideとは、野生の自然のただ中で活動するのに使うガイドブックで、動植物の姿かたち生態と、見分け方、見つけるための手がかりが絵入りで書かれているものです。日本では言えばいわゆる図鑑で、持ち歩いてかさばらず気軽に開ける携帯版です。

本書「スクラム現場ガイド」では、スクラムを使ってみたときに、きっと現場で遭遇する、新たな現象、見知らぬ形跡、恐ろしい妖怪などの見分け方と対処の方法が載っています。図鑑に載っているのが可愛い動物やきれいな草花だけではないように、危険な動物と有害な植物を見分け、注意して取り扱うやり方が載っているのです。

スクラムのルールはシンプルで、入門書は夢と希望で満ちあふれ、研修を受ければすぐ実践できる気分になります。いざ実際にスクラムをあなたの現場で始めれば、未開の原野にさまよいこんで、思いもかけないことが起き、何が理由でこうなったのか自分はいったいどうすればいいのか、分からなくなってしまうかもしれません。「こんなところに来るんじゃないかった」と泣き言のひとつも言いたくなるかもしれません。

そんなときには一息ついて、まずは気持ちを落ち着かせましょう。状況を整理し把握するべく、誰かに聞いてもらいましょう。そして本書のページを繰って、役立つ項目を探してください。動物図鑑と同じように、まったく同じには見えないかもしれませんが。同じ問題でも見えか

[1] 注: 2016年2月現在

たや感じかた、現れかたはそれぞれです。状況を慎重に見定めましょう。コンテキストを考慮しましょう。見えない裏側を見に行きましょう。あなたのチームのことならば、あなたが一番詳しいんです。

本書のアドバイスを従うのなら、ぜひとも最後まで従ってください。著者のミッチ・レイシーはまえがきで、こんなふうに言っています。

紹介するモデルは僕が現場で、物語で現れたような問題を解決するのに使うものだ。中には不快に感じたり、あなたの会社ではうまくいくと思えないものもあるだろう。僕としては、アドバイスを無視したいという感情や、モデルを変えてしまう衝動とは何としても戦ってほしい。少なくとも3回はそのまま試してみて、結果を見てほしい。

忘れていませんか、あなたが困ったことになったのは、未知の世界に踏み込んだせいです。未知に挑んだあなたの勇気は素晴らしい。ですから解決方法も、敢えて不安な馴染みないやり方を、勇気を持って選びましょう。先達の知恵と現場の経験を、借りの素直さと謙虚さも忘れることなくいきましょ。そしてあなたの現場では、どうすればモデルを変えることなしに、適用できるか考えてください。

そんなわけで、本書は現場に持ち込む本、スクラムで進めながらいつも持ち歩く本、困ったときに手元に調べる本、そういう本なので、頭からお尻まで精読したり、書いてある細部の矛盾や不備を追求したり、お勉強してお仕舞いにしたりするには不向きかもしれません。現場で困ったことがあったとき、すぐに取り出し眺められるよう、身近に置いておきましょう。困ったことをテーマにして、関係する章をチームで読んでみるのもいいでしょう。

本書の特徴のひとつに、数多くの参考文献・参考文献が挙げられているところがあります。各章で紹介する様々なモデルとテクニックにはたいいその元となり、原案となり、ヒントとなったアイデアやコンセプトがあります。そうしたアイデアやコンセプトに、参考資料をたどって直接触れられますし、あなた自身のアイデアが生まれる源泉になるかもしれません。興味を感じた項目があれば、ぜひ深く潜って調べてみてください。本書はそうした、スクラムを支える広大な知のネットワークへの門となるかもしれません。

ここであとがきの場を借りて、本書に取り上げられていない本を数点、紹介したいと思います。翻訳者である私自身、アジャイルとスクラムを始めた頃にこんな本があったらよかったのになあと感じました。スクラムを始めたところで、本書を手にとれた人が、うらやましい！一方、私が参考にしてきたけれど本書では触れていないものもあります。そうした本を何冊か、選んでみました。

アジャイルにやろうとし始めた初期の頃にとっても参考になったのが、意外や『UML モデリングのエッセンス』（マーチン・ファウラー 著 翔泳社）でした。UML というと重厚長大で無意味なドキュメントというイメージが今では強いかもしれませんが、この本では「UML をスケッチする」という考え方でいかにチーム内のコミュニケーションを数枚の図が強化できるか、そして「全体像を押さえるため、概要ではない、フレームワーク＝骨幹を描く」のが、変化に柔軟に対応できる設計に結びつき、ひいてはアジャイルな開発をエンジニアリング側から支えられるのかを紹介しています。エンジニアリングプラクティスのなかで見落とされやすい全体性の維持、全体設計をうまく扱えるようになりました。コードで意図を伝え合えるのは当然です！大事ですが、コードで語り尽くせない観点もあります。著者はもちろんアジャイルマニフェストの17名の1人なので、アジャイルの本ですね。さらに先へ進むと『UML モデリングの本質』（児玉 公信 著 日経BP社）があります。

アジャイルな手法はどれも、人間の強さを重視しています。2章のライアンが気づいたように、人をシステムのパーツではなく個人として扱う方が力を発揮する、ただ人数を集めるのではなく有機的なチームを育てれば何倍ものパフォーマンスを出せる。そうした要素を、アジャイルの文脈から離れて紹介しているのが『ピープルウェア』（トム・デマルコ、ティモシー・リスター 著 日経BP社）です。「第24章 混沌と秩序」からはたくさんの着想と勇気を得ました。また「第13章 オフィス環境進化論」ではアレグザンダーの『パタン・ランゲージ』（クリストファー・アレグザンダー 著、鹿島出版会）が紹介されています。人やチームの話とパターンとの交点には『組織パターン』（James O. Coplien, Neil B. Harriosn 著 翔泳社）があります。

本書はスクラムを実際に始めてから読む本ですが、始めながら人を巻き込んでいく、プロダクトオーナーやステークホルダー、マネジメントの人びとを「バスに乗せていく」のも大変です。スクラムの入門、基礎知識を付けるには『アジャイルサムライ ― 達人開発者への道―』（Jonathan Rasmusson 著 オーム社）、『SCRUM BOOT CAMP THE BOOK』（西村 直人、永瀬 美穂、吉羽 龍太郎 著 翔泳社）、『アジャイル開発とスクラム ～顧客・技術・経営をつなぐ協調的ソフトウェア開発マネジメント』（平鍋 健児、野中 郁次郎 著 翔泳社）、『Software in 30 Days スクラムによるアジャイルな組織変革“成功”ガイド』（Ken Schwaber, Jeff Sutherland 著 アスキー・メディアワークス）などがあります。スクラムという「新しいアイデア」を広めるうへでは、拙訳ですが『Fearless Change アジャイルに効くアイデアを組織に広めるための48のパターン』（Mary Lynn Manns, Linda Rising 著 丸善出版）が素晴らしいガイドになります。

本ではなく、生きた人間に話を聞いたり相談したくなるかもしれません。日本ではアジャイルやスクラムをテーマとしたコミュニティがいくつもあります。「すくすくスクラム」「アジャイルひよこクラブ」「POStudy」「スクラム道関西」「Scrum Master's Night」などがありますが、

他にも小さなところや、地方で活発に活動しているところもあります。テーマも多岐にわたります。身近な、参加しやすいところを自分でも探してみてください。

最後になりましたが、書籍の翻訳という長い旅に付き合ってくれた翻訳者のみなさんに感謝したいと思います。また編集者の伊佐さんにも、辛抱強く待ってくれ、ときには適度に急かしてくれ、そして素敵なお本という形にしてくれたことに感謝します。モノがあるっていいですね。

レビューアーのみなさんにも大変に助けられました。今給黎 隆さん、円城寺 康人さん、川口 恭伸さん、木村 卓央さん、佐藤 竜也さん、佐野 友則さん、中村 洋さん、半谷 充生さん、古家 朝子さん、山口 鉄平さん、ありがとうございます(順不同)。翻訳者一同、私たちがいつも支えてくれた家族に感謝を捧げます。

なお本書の翻訳では、GitHub、Amazon EC2、Jenkins、Sphinx、yomoyama、英辞郎、COBUILD英英辞書、MIFESなどのサービス、ソフトウェアを利用しました。

2016年2月
翻訳者を代表して
安井 カ